

遠野と口承文芸

石井正己

一、口承文芸の研究と継承

ここに掲げた「口承文芸の研究と継承」というテーマは、現代の本質的な課題の一つであると思います。私どもの会は「日本口承文芸学会」という名称を持ち、「学会」を名乗ることからも知られるように、学術的な研究が中心にあります。そして、学会員には、日本はもとより、海外をテーマにした研究者も多いので、この「日本」は研究の対象というより、研究の場所を表すと考えておくべきでしよう。

一方で、数年前、大林太良が「口承文芸は終わつた」と述べたことは、この学会にとつては少なからぬ衝撃でした。¹⁾しかし、むしろ、最近では、「口承文芸の「継承」ということがことのほか意識化される時代を迎えたのではないかと感じられます。「研究」と「継承」は対立するようなものではなく、むしろ相互補完的に進められるべきものだという考え方が広く浸透してきています。

振り返つてみれば、長い間、文字はもとより、録音や録画による保存が考えられてきました。そして、日進月歩進んできた記録の技術に対応するかのように、資料化の方法が模索されてきたのです。昨年の大会のテーマになった「保存」や「活用」という問題も、そうしたことと深く関わっています。それに対して、「継承」というのは人間から人間へと受け渡してゆくことです。そういう点で、近年の口承文芸は、大林の予言を裏切るかのように、新たな方向を模索しつつあると言えましょう。例えば、柳田国男はこれからは研究者が伝承者になるというようなことを予言していました。²⁾もちろんその反対の状況も進んでいて、伝承者が研究者として文章を書いてゆくことがすでに盛んに起こっています。ここに来て、伝承者と研究者を明確に分けることが難しい状況になりました。柳田の発言は戦後まもなくの予言ですが、二一世紀に入つて、確かにそういう時代を迎えたと言つていいかもしれません。

そうしたことを考えるならば、「研究」と「継承」と二つに分けても、もはやあまり意味がないと言つていいでしょう。この二つを分断するのではなく、互いに搖らぎ、そして越境するものとして考える必要があります。そういう意味では、遠野という場所は日本の「地方都市」ですが、「口承文芸の研究と継承」という点では、かつても最前線であつたし、現在も最前線にある場所ではないかと思います。ですから、遠野という場所から、この二つの問題で議論を深めてみると、大きな意義のある

ことではないかと考えているのです。

二、『遠野物語』と口承文芸

明治四三年、柳田国男は遠野の人佐々木鏡石（喜善）から話を聞いて、『遠野物語』を出しました。今から九三年前のことです。この作品が刊行されるまでの経緯は、すでに委細を尽くして述べました⁽³⁾。その中で述べたことの一つに、序文で話し手にして述べました。純化されている佐々木喜善は、単なる話し手ではなく、書き手としても深く関与しているのではないかという推定がありました。『遠野物語』は東京で、年下の若者から聞いた話をまとめたのであり、目に一丁字なき古老から聞いたという体裁のものではなかつたのです。

重要なのは、『遠野物語』が出る直前、柳田が佐々木に出した葉書に、遠野の人には一冊も送らないと書いていることです。この作品は、遠野の外の人と遠野の中の人では読み方が違うということを、柳田が自覚したからにはなりません。遠野の外の人には固有名詞もAさんという記号と違いませんが、中の人には固有名詞からどこの家の話か克明にわかつたはずです。『遠野物語』というのは、柳田にとって、非常に危険な本として意識されたのです。

例えば、生まれた河童の子を切り刻んで土中に埋めたといふ話には、最後に固有名詞が書かれていましたが、初版で伏字

になります。序文に言挙げした「目前の出来事」「現在の事実」を実現するかのように、地名や人名を詳しく書いてきたにもかかわらず、最後に搖らいだのです。この家の名前は「〇〇〇〇〇」と伏せられ、さらに戦後版では「何の某」となって、痕跡さえ見えなくなります。柳田には、どうも生涯にわたって、『遠野物語』を出してしまった悔恨があつたように感じられます⁽⁴⁾。

一方、佐々木喜善は、『遠野物語』ができたとき、柳田から贈られた本を受け取って、非常に喜びました。これで遠野が世の中に出ると言っています。柳田は『遠野物語』に対して怯え、佐々木が『遠野物語』を喜ぶというのは、誠に対照的です。けれども、その問題というのは、九三年経つた現在でも、そのまま持ち越されています。遠野は『遠野物語』で町おこしをしてきたところがありますが、この作品の本質に入り込むと、実は厄介な問題に突き当たつてゆくことになるのです。

改めて考えれば、『遠野物語』は、口承文芸という概念が成立する遙か前に出されているのです。『口承文芸大意』が出たのは昭和七年ですから、一二二年も遡ることになります。口承文芸が成立してくる段階で、「昔話」「伝説」「世間話」といった概念が明確になつてきますが、『遠野物語』の時にそうした枠組みがあつたわけではありません。厳密に考えれば、口承文芸という概念で『遠野物語』を研究することは本末転倒だということを考えておく必要があるはずです。

例えば、『遠野物語』は世間話集だという見方がありますが、

これには反対です。なぜならば、「世間話」というのは「昔話」「伝説」に入らないので困ってしまうような話を呼んだもので、柳田の「世間話の研究」などから拡大解釈して当てはめてしまうのは危険でしょう。それは、「現代民話」や「都市伝説」と言い替えてみても、同様です。「遠野物語」を世間話集と呼んでしまうことには、思考の逆転があると思われます。

むしろ、柳田が『遠野物語』の当時に抱いていた関心は、序文に「山神山人の伝説」というように、広義の「伝説」にあります。しかし、佐々木は、その後、ザンキワランやオシラサマの研究を経て、特に昔話の研究に力を注いでゆきます。そうしたことであつて、口承文芸の中心的な位置を昔話が占めてゆくことになつたようです。口承文芸は『遠野物語』の作り上げたような世界を切り捨てることで成立したと言つてもいいと思います。

から炭焼きに来ていた浅倉利蔵という人から聞いた話をまとめています。この本では、従来の「御伽噺」や「童話」を捨てて、「昔話」という言葉を初めて使いました。しかも、その中には、「昔話」のほかに、「口碑」と「民話」という分類を立てています。後に注目されることになる「伝説」や「世間話」の端緒が、すでにこの本にあつたことがわかります。⁵⁾

続く大正一五年の『紫波郡昔話』は、紫波郡煙山村（現矢巾町）に住んでいた小笠原謙吉から送られた資料を書き直したもので、この資料には、小笠原が祖母から聞いた話と煙山小学校の児童が書いた作文の二つが混在していました。佐々木はその中から伝説に当たる話を除き、昔話だけを取り出して、同じ文體に統一したのです。やや強引な力技でしたが、この本によつて、柳田は昔話の魅力に取り付かれていきました。⁶⁾

三、佐々木喜善の昔話研究

『遠野物語』の話し手であった佐々木喜善は、口承文芸という概念が生まれる前に、その基礎を作る数多くの業績を残しました。なかでも重要なのは、東北の地に語り継がれてきた昔話の研究でしょう。大正から昭和にかけて、『江刺郡昔話』『紫波郡昔話』『老嫗夜譚』『聴耳草紙』などをたてつづけに刊行しています。日本における昔話研究は、まさに喜善から始まつたのです。大正一年の『江刺郡昔話』は、江刺郡米里村（現江刺市）

昭和二年の『老嫗夜譚』は、佐々木のすぐ近くに住んでいた辻石谷江という老女から聞いた話をまとめていました。極寒の冬、毎日のように通つて、その話をノートに取つて一冊にまとめたのです。この本は、昔話の語り手を発見したという点で、画期的な記録となりました。その際、喜善が記録を取つていると、噂を聞いた話好きの連中が集まつてきました。この本は、聞き書きの場が作り出す問題までも浮かび上がりさせていたのです。⁷⁾ 生前最後の刊行になつた昭和六年の『聴耳草紙』は、自ら聞いた話だけでなく、青森・秋田・岩手・宮城の各県の協力者から寄せられた昔話を集大成したものです。この本には、それま

での昔話集に入れた話は載せませんでしたから、落穂拾いのようなどころがあります。しかし、これは単なる寄せ集めではなく、話の分子が集合して昔話になるという昔話成長論を前提にしています。こうした考え方では、柳田の昔話観とは厳しく対立するものでした。⁽⁸⁾

こうして見ると、日本では、まだ誰も昔話に注目していなかつた時代に、佐々木はいちはやくその価値を発見していたことがわかります。そうした先見性を認めて、金田一京助は「日本のグリム」と讀んだと伝えられています。ドイツのグリム兄弟の童話集から一世紀近く後れて昔話集を刊行しはじめたのですから、この命名は実に正鵠を射たものでした。

しかし、こうした仕事を、柳田は「研究」ではなく、「採集」と呼んで区別しました。「採集」は「研究」の前段階にあると考えたのです。確かにこれらは資料集であって、研究書ではありません。しかし、四冊のどれもが、まだ誰も経験したことのない昔話集の実験だったことを忘れてはなりません。優れた「採集」というものは、「研究」を抜きには成り立たないことを考えてみるべきでしょう。

柳田のような考え方が浸透していたのでしょう、私が一〇年ほど前に佐々木の研究を始めたころには、佐々木は研究史の一齣にすぎないという認識がありました。しかし、研究を重ねてみると、佐々木は誰よりも時代の先をよく見ていたことに気がつきました。過去というよりも、むしろ現代だという印象さえ

持ちました。そして、先駆的な仕事は、いつの時代にあっても、研究の現在を反省する鏡になると考へるようになつたのです。

四、柳田国男と口承文芸

すでに多くの研究者が指摘しているように、翻訳語として、「口承文芸」という言葉を作りだしたのは、ほかならぬ柳田国男でした。昭和七年の『口承文芸大意』においてです。しかし、この言葉の成立は、翻訳の問題だけで説明できるわけではありません。この言葉を翻訳語として生み出すまでの前史こそ、それと同様に必要なことではないかと思われるのです。

この言葉を有名にしたのは、『口承文芸大意』よりも、昭和二年の『口承文芸史考』という本になつてからではなかつたかと思われます。⁽⁹⁾ 実は、その昭和二二年というのはやはり大事な年であり、この本で打ち出したかったのは「神話」という言葉だったようです。記紀の神話ではなく、失われてしまつた「神話」を熟視する必要があると説いています。戦後、もう神話は終わりだと否定してゆく風潮の中で、むしろ逆流するかのように、「神話」とは何かということを持ち出したのです。

こうした態度は、実は口承文芸という枠組みとは、やや乖離しているところがあります。けれども、柳田は、失われたものをもう一度掘り起こしながら考へることの必要性を常に説きつけました。「昔話」もそうだったと思いますし、実は口承文

芸にさえそうした認識があつたかもしません。『口承文芸史考』は、「神話」を否認する時代風潮のなかで、「神話」の価値を「口承文芸から説こうとしたのです。

この本は、大きく二つの柱があつて、一つは「口承文芸とは何か」です。これはすでに述べた『口承文芸大意』を改題したものです。この文章はどちらかというと、口承文芸の空間的な広がりをとらえようとしたものです。「新名称」「命名技術」「新語と新句法」「諺の範囲」から、最後は芸能、芝居にかかるようなことまで含んでいます。これは我々が何となく思い描いている「口承文芸より、かなり広い概念ではないかと思います。

もう一つは「昔話と伝説と神話」です。これは『昔話研究』に連載した「昔話覚書」を改題したもので、この文章は、「昔話」「伝説」「語り物」から滅びた「神話」が復元できるだろうとう仮説を述べています。しかし、注意しなければならないのは、この「昔話と伝説と神話」の中には、「口承文芸」という言葉は一語も見つからないことです。『口承文芸史考』の一つの柱でありながら、これは決定的な問題だらうと思います。

しかし、私たちがこの本の中で、戦後どこを重点的に読んできたかなど、「口承文芸とは何か」ではなく、「口承文芸」の「史」としての「昔話と伝説と神話」だったことを忘れてはなりません。ところが、その中には、「口承文芸」という言葉は一言も使われていないのです。そこには、戦後の「口承文芸研究の置かれている歪みがあるのではないかと感じられます。

五、「民話のふるさと」の仕組み

柳田が『口承文芸史考』に収録される論考をまとめてゆく時代に、佐々木はめぐりあうことができず、昭和八年に亡くなりました。その後、遠野において佐々木に代わる仕事が継続されたわけではありません。戦後、遠野では、及川勝穂という人が出て、「遠野風土草」などを著して、民俗学的な研究を行いましたが、早く亡くなりました。

そういう空白期を経て、遠野が再び立ち現れてくるのは昭和四〇年代半ばになつてからです。今、遠野は「民話のふるさと」というキャッチ・フレーズで全国に知られていますが、「遠野物語」刊行の時代からそう呼ばれていたわけではありません。もしそうした印象を抱くとしたら、それはまったくの幻想に過ぎません。ちょうど、遠野が「民話のふるさと」と呼ばれるようになつた時期、二つのことが並行して進みました。¹⁰⁾

一つは、『遠野物語』の発刊六〇周年を記念して、序文を刻んだ碑を建てました。長らく顧みられなかつた『遠野物語』の見直しが始まつたのです。その後、民俗学に力を入れた図書館博物館の建設に始まり、佐々木喜善記念館を中心とした伝承園、柳翁宿や柳田の隠居所を移築したとおの昔話村、曲がり家を移築した遠野ふるさと村などの設備を整えてきました。『遠野物語』にふさわしい町づくりが実施されてきたと言えましょう。

もう一つは、語り部の創始者であつた鈴木サツ姫が、父親の菊池力松の代わりにラジオで昔話を語つたということがあります。さらに、遠野市民センターのこけら落としで、初めてオシラサマの話を語ります。サツ姫はオシラサマの話を知りませんでしたが、福田八郎から聞いて、即座に覚えて語つたそうです。ちょうどその頃から、遠野を訪れる観光客に語つたり、大都市の物産展に呼ばれて語つたりはじめています。

今、遠野では、オシラサマ・ザシキワラシ・カッパ淵が三天話と言われていますが、みな『遠野物語』にある話です。しかし、実は、サツ姫はそれらの話を後から覚えたのです。その背景には、遠野の語り部なのだから、『遠野物語』にある話を語つてほしいという期待があつたものと想像されます。そうした期待に応えて語つた結果、遠野に来た観光客は、『遠野物語』は今も生きている、という感慨を抱くことができるようになつたのです。

ところが、厳密に言うと、『遠野物語』にある昔話は二話に過ぎません。その中の話は、柳田が序文で「目前の出来事」「現在の事実」と規定したように、実話です。しかも、その中には、悲劇的な話がいくつも含まれます。すでに述べたように、『遠野物語』というのは、この地域のタブーを抱え込んでいるのです。こうしたことの曖昧に包み込んでしまったのが、ほかならぬ「民話」という言葉ではなかつたかと思います。

しかし、私はこうしたことに目をつぶるのではなく、『遠野物語』や昔話を観光資源とするならば、『遠野物語』や昔話とは何

かという理解が、市民の中に共有されねばならないと言つてきました。こうした動きは、柳田や佐々木が考へていたのとは全然別の方に向かって進んでいます。一方で、伝承の場に観光を持ち込むことには強い批判もありますが、終わりだと言われていた語りが生き返つてくる現場になつてゐることは否定できません。

遠野は次々と施設を建てただけでなく、そこで語り部たちが語りを披露するシステムを作り上げました。言わば、ハードとソフトとを兼ね備えてきたのです。最近では、町場の再開発も進み、一方では次の時代を担う人々のボランティアの語りも始まっています。こうした状況は、まさに「口承文芸の研究と継承」いう課題と深く関わるはずです。そして、遠野の一〇〇年を掘り下げれば、日本の口承文芸研究の動態が鮮やかに見えてくるだろうと確信しているのです。

注

(1) 大林太良「人類文化史における口承文芸」(『口承文芸研究』

第二〇号、一九九七年三月)。

(2) 柳田国男「伝説のこと」(柳田国男監修・日本放送協会編『日本伝説名彙』日本放送出版協会、一九五〇年)。

(3) 石井正己「遠野物語の誕生」(若草書房、一〇〇〇年)。

(4) 石井正己「遠野物語」の文献学的研究」(『口承文芸研究』

第一六号、一九九三年三月)、石井正己「柳田国男と遠野

物語」(三弥井書店、二〇〇三年)。

(5) 石井正己「昔話と佐々木喜善」(『昔話の世界—その歴史と現代』) 遠野物語研究所、二〇〇〇年)。

(6) 石井正己「昔話叙述の方法—小笠原謙吉と佐々木喜善」『□承文芸研究』第一八号、一九九五年三月)。

(7) 石井正己『遠野の民話と語り部』(三弥井書店、二〇〇一年)。

(8) 石井正己「『聴耳草紙』の方法」(『昔話—研究と資料』)

第二三号、一九九五年六月)。

(9) 石井正己「□承文芸史考 解題」(『柳田国男全集 第一六

卷』筑摩書房、一九九九年)。

(10) (7) に同じ。

シンポジウムの要旨を引用しておきます。

【シンポジウム全体の主旨】 このシンポジウムでは、□承文芸について、「研究」と「継承」という二つの側面から議論を深めてみたい。そのためには、「民話のあるさと」として知られる岩手県遠野市は、重要な拠点になるのではないか。遠野は、柳田国男が『遠野物語』を書き、佐々木喜善が昔話を求め、時を経て、語り部が昔話を語りつづけてきた歴史を持つ場所だからである。具体的な事例としては遠野を取り上げながら、日本や世界を考えるための普遍的な話題にまで話を広げるつもりである。

柳田国男／『遠野物語』から 東京学芸大学 石井正己(司会兼

この学会の生命線である「□承文芸」という用語は、柳田国男の創造したものであり、初出が『□承文芸大意』であることは、広く知られている。しかし、戦後『□承文芸史考』になると、その位置づけが変わってしまう。そして、柳田の死後、かえりみられた「□承文芸」は、さらに少なからぬ偏向を帯びていたように思われる。柳田の束縛を離れて、「□承文芸」を豊かにとらえ直したいといふのは、誰もが望むところであろう。だからこそ、今、もう一度立ち止まって、柳田国男と「□承文芸」の問題を議論してみたい。

一方、『遠野物語』は、「□承文芸」が成立する前に書かれた記録である。後に生まれた用語、「世間話」などとらえよう

いと思いますので、東京学芸大学の石井宛に文書でご連絡ください。なお、ここには、事前に送付した大会案内に掲載したシ

としても捨いきれないのは、おそらくそのためである。『遠野物語』は村の抱え込む「目前の出来事」「現在の事実」と向き合つたが、その後、こうした記録が書かれることはついになかった。

それはまず、他ならぬ柳田自身から疎まれていたからにちがいない。にもかかわらず、遠野は『遠野物語』を町おこしに活用する。そこで、ここでは、研究と地域における『遠野物語』の位置を確認してみたい。

【参考文献】後藤総一郎・宮田登他編『柳田国男全集』筑摩書房、一九九七年)。石井正己『遠野物語の誕生』若草書房、二〇〇〇年。

○〇〇年。石井正己『遠野の民話と語り部』三弥井書店(二〇〇一年)。

佐々木喜善／博物館から 遠野市立博物館 小笠原晋

佐々木喜善は「民話のふるさと遠野」を形づくった遠野を代表する先人であるが、現在でも『遠野物語』の話者として紹介される機会が多い。喜善は昔話の収集と研究に先駆的な役割を果たしたが、仙台で不遇の生涯を閉じ、遠野市民によつてその業績が正當に評価されることには少なかつた。

喜善の業績の掘り起こしは、菊池照雄や山下久男などによつて行われてはいたが、その理解と市民への普及は遠野市立博物館の開館を待たなければならなかつた。常設展示や学校教育との連携の中で、喜善の業績が市民に見える形で紹介された。

また昭和六一年には、生誕百年を記念し、「佐々木喜善展」を開催し、『佐々木喜善全集』の発刊が計画された。昭和六一年に第一巻、昭和六二年に第二巻、平成四年に第三巻を刊行し、

現在第四巻の発刊作業を進めている。第四巻には、喜善の日記が収録されるが、この全集の完結によつて、喜善研究が新たな段階を迎へ、喜善の再評価がなされることを願つてはいる。

【参考文献】菊池照雄『佐々木喜善——遠野伝承の人』遠野市立図書館、一九六九年。山下久男『佐々木喜善先生とその業績』遠野市教育委員会、一九八二年。山下久男著、石井正己編『雪高き閉伊の遠野の物語せよ』遠野市立博物館、二〇〇〇年。佐々木喜善『佐々木喜善全集 I～III』遠野市立博物館、一九八六年。

女性／昔話集から 昔話研究土曜会 田中浩子

私たちはこの度、『正部家ミヤ昔話集』を作つた。これは編者四人が聞いた昔話集である。昔話の語りは、語り手と聞き手の共有する場で成り立つ。さらに、一人の語り手の昔話を長い時間をかけて聞くということは、切り取られた昔話を聞くのではなく、語り手を丸ごと聞くことである。そういう昔話を私たちが聞いたように記録としてとどめたいと思い、昔話だけでなく昔話と昔話の間に聞いた話も入れることにした。

この本を作るにあたつて、いくつかのパートに分けて責任分担するのではなく、すべてを四人全員で検討し、議論を積み重ねて作り上げた。音の聞きとり、句読点、段落分け、「」の括り方、話を並べる順序、昔話以外の話、まえがき、あとがきに至るまでである。佐々木喜善と同時代を生きた父力松さんから、たくさんの昔話を聞いて育つたミヤさんの昔話を、同じく

家庭を持ち子どもを育ててきた、ミヤさんより一世代あとの私たちがどのように聞き、どのように本にしてきたか、そこで何を考えたかを報告したい。

【参考文献】鈴木サツ全昔話集刊行会編『鈴木サツ全昔話集』福音館書店、一九九九年新版。小池ゆみ子・小林美佐子・田中

浩子・丸田雅子編『正部家ミヤ昔話集』古今社、二〇〇一年。

観光／映像資料から 甲子園大学 川森博司

私と遠野との関わりは、一九九四年から九五年にかけての映像記録の作成から始まった。特に私の中心的な研究テーマであつた昔話の語りを、そのコンテクストを含めて記録しようとしたとき、目の前に展開していたのが、観光客を相手に昔話を語るという「場」であった。特定の時代状況を映像に収めるための拠点となる「参与觀察」の場として「観光の文脈」が浮上してきたのである。昔話の語りは聞き手の存在を前提とする。遠野においては、外部から訪れた新しい聞き手に、地元の古い昔話を語るという活動がおこなわれている。今回のシンポでは、そのことの意味を改めて考えてみたい。私の関心は、地元の人々の現在の活動が、どのように昔話という資源を活用し、どのような未来への展望を拓いているのか、という点にある。「昔ばなし祭り」や「遠野物語ファンタジー」の活動などを含めて、観光の文脈について、問題点を整理してみたい。

【参考文献】山下晋司編『観光人類学』新曜社、一九九六年。
川森博司『日本昔話の構造と語り手』大阪大学出版会、二〇〇〇年。

〇年。川森博司『囲炉裏端の語りから観光昔話へ—昔話世界の変容—』『遠野物語研究』第六号、二〇〇二年。

語り部教室／再話から 遠野物語研究所 佐藤誠輔

平成八年に始めた語り部教室は、核家族が増えて来た今、親から子供、そして孫へと連なる伝統的な語りの道筋だけを待つていては、「遠野物語」と昔話の町から語る人がなくなつてしまふ、という危機感から始まった。

(1) 語り部の地位を高めよう、(2) 遠野人なら、昔話の一つや二つは語れるようにしたいな、という願いもあつた。平成一二年、語り部教室に参加した有志が集まつた「いろいろ火の会」の発足によって、その願いが達成された様に思う。

一方、『遠野の民話 I、II、III』という形で、私は、柳田国男が『遠野物語』で掬い切れなかつた話の落ち穂拾いをしている。そのほとんどは、佐々木喜善が拾い集めたもの、そして、伊能嘉矩や現代の老人たちが暖めて来た伝説・世間話・昔話、つまり民話である。特に喜善は、単なる民話の採集者ではなく、民話を郷土の口承文芸、即ち価値あるものとして位置付けた先駆者として見てほしい、そんな思いもある。

【参考文献】佐藤誠輔『遠野の民話』遠野物語研究所、二〇〇一年。
佐藤誠輔『遠野夜譚・遠野の民話II』遠野物語研究所、二〇〇二年。石井正己『昔話の伝承と資料に関する総合的研究』科学研究費報告書、二〇〇三年。

(いしい・まさみ／東京学芸大学)